

發生期の物語・物語論

今 井 卓 爾

日本の古い時代のいつごろのようにして文藝に対する意識が發生してきたかといふことはなかくいちがいきめてしまえないことである。日本の文化、ことに文藝は大陸の影響のもとに生育してきたことは争えない事実であるから、文藝に対する自覚も恐らく大陸の影響をうけた面が多かつたのではないかといふことは考えられてよいであろう。実際に文藝現象としてあらわれているのは、和歌の方面では「万葉集」や「歌経標式」あたりからであることは認められてよいことである。これ以前にも「記」・「紀」や漢文学の方面に於てもそういう傾きを見る事は出来る。いまここで取り上げようとしてゐる發生期の小説―物語については言へば、無論「記」・「紀」や「万葉集」にもその萌芽の窺むべきものはないといふのではないけれども、小説―物語として自覚され、創作を意識したものとしては平安時代になつてからであるようである。物語としての意識のもとに創作されたものは「竹取物語」まではなかつたと言へば言えないことばないのであるが、実際には空海の作品や景戒の述作の中にすでに「竹取物語」の存在し得べき要素が意識されたものとして存在したのであつた。即ち「譬

譬指帰」や「靈異記」は明白に小説―物語としての自覚を意識して作られていることによつて物語の祖が必ずしも「竹取物語」でないことが分るのである。或は物語の種子であつたと言つてもよいかも知れない。たゞこれらが純粹の和文でないことと、あまりにもはつきりとした意識が先立つてゐることによつて、「竹取物語」以前に存在した物語の祖であるとは言いきれないものをもつてゐる。しかし「記」・「紀」から「竹取物語」までを見渡したところ、やはりこの二作品の代表するものは逸し去ることは出来ないであろう。現存する資料の不足は究明に幾多の困難をともしなくては勿論であるが、物語の祖ではなくても、必要にして不可欠であつた種子であり肥料であつたことにはちがいない。空海と景戒の作品の存在の意味を考えることは、物語や物語論の生育を明かにする大きな助けの一つになると予想する。

「譬譬指帰」は空海の著であると伝えられている。空海は證して弘法大師と言つたことは周知のことと、宝龜五年（七七四）に生れ、承和二年（八三五）高野山にて寂した人である。漢文学を研

究し、仏門に入り、大陸に渡つて研讀につとめ、帰朝ののち仏教の弘通に力をいたしたのであるから、仏教家としての空海は根本として考えの中に入れておかななくてはならない。漢文学や詩学をきわめ、それらを日本に植えそだてた力も大であつたから、宗教のみでなく文藝の方面でも沢山の業績をのこしている。「文鏡秘府論」・「文筆眼心抄」・「雙管指帰」・「三教指帰」ついで「性靈集」などはこの方面の重要な著述としてあげることが出来る。これ以外にも著述は極めて多い。

「雙管指帰」はその序によると延暦十六年（七九七）にあらわしたものである。この作品をどういふ種類の文藝に入れてよいか知らないが、あるものには辭賦というような分類に入れている。内容はその序について龜毛先生論・虛毛隱士論・仮名乞兒論である。この作の意図をまず序によって見ると、次の様である。

復有唐國張文成、清散勞書、詞貫瓊玉、筆翔鸞鳳、但恨、淫、紙、淫、事、曾、無、雅、詞、面、卷、舒、紙、柳、下、興、歎、臨、文、味、句、柔、明、啓、勸、本、朝、日、雄、人、述、睡、覺、記、勝、井、巧、發、詭、言、雲、敷、遙、聞、彼、名、戶、居、之、士、拍、掌、大、笑、僅、對、其、字、噤、極、之、人、張、口、奉、聲、並、雖、先、人、之、遺、美、未、足、後、誠、之、準、的、

唐の張文成の散勞の書である「遊仙館」は稀にみる名文であるが淫猥にすぎ、わが国の日雄人の睡覺記は面白いが滑稽にすぎ、ともに後人を教誡する模範標準とするに足りるものではない。そこで諸、龜毛、以、爲、備、客、求、兎、角、而、作、主、人、詆、虛、亡、士、張、三、人、道、旨、屈、假、名、兒、示、出、世、趣、

龜毛を備者とし、兎角を主人公にし、虛毛を道家とし、仮名兒を

して仏教の訓える所におもむかせるというのである。上巻―龜毛先生論には兎角公の外甥に姪牙公子という不良青年がいて手におえなかつたのであるが、備者龜毛先生の説論によつて、今より以後心を専らにして奉習せん」と真人間にかえることをといてゐる。この姪牙公子というのは、「その人となり、狼心狗胆にして教誘に纏はれず、虎性暴悪にして礼義に羈かれず、博戯を業となし鷹犬を事となす。遊俠にして頼なく、奢慢餘あり。因果を信ぜず罪福を諸はず。酔ふまで飲み飽まで喰つて色を嗜み寝に沈めり。親戚病あれども曾て愁ふる心無く、疎人相對へども敬接の志なし。父兄を押れ侮り着宿を修り凌ぐ。」という人物であつた。この遊蕩児をいかにするかということが、この作品の最も大きな主題をなすところのものであつた。中巻―虛亡隱士論には道士の虛亡隱士が「今當に子に授くるに不死の神術を以てし、汝に説くに長生の奇密を以てすべし。」として道教の理を説いて儒教を厭したの

その前半は、

作、心、漁、孔、教、馳、獵、狩、老、風、
双、管、今、生、始、並、息、來、葉、終、
方、現、種、覺、尊、円、寂、一、切、通、
誓、深、梁、瀕、海、慈、厚、灑、焚、籠、

この作品が儒、道、仏の三教の優劣を論じ、仏教の最もすぐれた所以を諷したものであることはあきらかである。そして仮名乞児が二十四歳の空海自身であることも察せられることであつて、以上のことを中国などの故事を多分にふまえながら説いている知識の該博なことは驚くべきである。この作品は以上のように、仏教の弘通が中心になつているのであつて、内容も表現も所謂物語らしい物語であるということは必ずしも言われなかつても知れない。あまりに抽象的な文字が多く、物語として具象性に欠ける点があることは言うまでもないことである。だからこの「靈誓指掃」を所謂小説―物語としてよいかどうかは問題であるとしても、少くとも張文成や日雄人の作品をひきあいにし出し、それらを先人之遺美として十分認めながらも、なお自己の道德的宗教的或は社会的功利的な立場からその不当を批判しているのみでなく、その二人の作品の欠点を補うために自から教誡之準のなることを意識して著わしたものがこの作品であるのであるから、これは、そういう意味における物語であるとしてよい。しかもこの作品は書くという意識を明白に自覚したものであり、その上著作の根本的立場をも明示している作品である。従つてこの作品は日雄人の「睡覚記」につぐ日本の古い物語であるという意味から、日本の小説史のはじめをかざる大切な作品でなくてはならない。しかも文藝批評史の上では、張文成や日雄人のものを仏教思想的功利的な立場から評論したという点からも見落すことの出来ない作品であるばかりでなく、そのような主張のもとになされた述作であるとい

うところにも亦大きな意味を見出さなくてはならない。「靈誓指掃」は日本の小説史や文藝批評史の上から大きく再検討せられその地位が与えられるべき作品である。当時儒佛道の三教がすでに日本の文芸の上にはば／＼あらわれてきていることは「万葉集」を見ても分る通りであるが、これらを十分に意識的に文藝としての世界にとりあげたものはなかつたであらう。「記・紀」や「万葉集」に於てもいくらかはそうであつたが、こゝに至つてはつきりした形をあらわしてきている。やがて「日本靈異記」が仏教的説話を意識してとりあげているのも決して偶然でも何でもないことである。文藝をこういふように仏教哲理から積極的に考察することの上しあはべつにして、空海によつてこの主張が強くとかれていることは、即ち批評に於ても創作に於ても意識的に扱われていることは、日本の文藝の史的経過を考へる上にはどうしても見逃してはならない。

「三教指掃三巻は「靈誓指掃」とは同じ作品であつて、序と巻末の十韻とがことなるほか、本文が所々異つている程度で差はない。序の中に自己の立場をあきらかにしているが、「靈誓指掃」のような意図は明示していない。この方が一般的ではげしさがやわらんでいるのではないかと思われる。先はじめに、
 文之起必有由。天朗則垂象。人感則含筆。是故
 麟卦聘簡周詩楚賦。動乎中書手紙。雖云凡聖殊質。古今
 異時。人之写真。憤何不言志。

と言つて一般に文がいかにして生ずるものであるかを述べてい

る。この思想は「文鏡秘府論」のもつている根本と同じものである。文章、文藝の起原が人間に於けるやむにやまれない自然発生的のものであることを言おうとしているわけであろう。「我を縛ふに五常の索を以てし、我に断るに忠孝に乖くといふを以てす」多くの親讒、性則も很戾にして、鷹犬酒色夙夜に楽しみと爲し、博戲遊佚以て常の事と爲す」表裏にたえられず「憤懣之逸氣を寫」したものであると言つている。著作時期については序末に延暦十六年とあるから、「豊誓指帰」と同年である。この殆んど同じ内容の二著がどうして存在するのかは知らないが、「豊誓指帰」は空海の真筆が伝えられているというから誤りはないとしても、「三教指帰」の存在はどうすべきであるか。恐らくは初稿本と改稿本との違いではあるまいか。序のとき及ぼすところは異ついてもその趣旨に於ては同一でかわりはないであろう。書名によって釈李・孔の三教が明かであることはさきかのかわりもない。神道について論及するところのないのは、空海という人の立場のしからしむるところであるかも知れない。空海の以上の二著は同一に取扱つてもよいものであるが、物語や物語論の場合、「豊誓指帰」の明確な立場の方に重点がおかれねばならないことは当然である。

「散勞書は「豊誓指帰」の序文に示され、空海が相手としてゐるものであるが、作品名なのであるか、勞を散ずる書物という意味であるか明かではないが、前後の關係から後者であろうと思ふ。空海の言う所によると、次のようなものである。唐に張文成という人があつて憂き晴らしの書物をあらはした。それは、詞の

つゞきは珠をつらねるが如く、筆端には鳳凰が舞い翔る趣があるという稀有の美文であるが、但し惜しいことには、むやみに男女の卑猥を書き散らして、氣高い雅びた趣というものがなく、本に向つて紙をくると、そばにあぐら肌ぬぎの人がいても氣にかけないという柳下惠も、「どうも、これでは、」と歎聲をもらし、又文章に読み入つて句を味わつてゆくと、脱俗悟道の僧も胸さわがして心がうごいてくるというものである。張文成の著述でこうした内容のものは恐らく「遊仙窟」であろう。張文成（約六六〇—七四〇頃）は唐の文人であつたというが詳しいことは分つていない。「遊仙窟」は早く中国には散逸してしまつたが日本に現存する物語である。作者が黄河の上流に使した途中とまつたある大家の女である十娘、五娘と詩文をあそび、歡会をつくし契つたことをのべたものであるが、描写が往々露骨淫猥にわたるところのある作品である。唐より伝来以来、奈良時代平安時代に非常にもてはやされたらしい物語であり、空海の時代には勿論流布していたのであろう。従つて空海も言う通り仏道修行の者のさまたげになる点多かつたことが想像にあまりがあり、これが悪影響の部分の矯正が空海としては必要を感じるようになったのであろう。けれども空海は「遊仙窟」を否定しきつてはいない。散勞書として、また先人之遺美としてその文藝的価値を認めているわけである。自身は仏教弘通のための文学をものしたけれども、仏教教化のための文藝以外の物語も認めているところに空海の文藝に対する態度があるのではないであらうかと思ふ。

「睡覚記」は五十嵐力博士が「平安朝文学史」ですでに注意しているように「雙警指掃」に出てくる作品である。作品名なのか、睡覚の記なのかはつきりしない。散勞書と対比せられると後者のように考えるのが自然のようでもあるが、一方では何々記という書名のものが多いことを考へるならば作品名と考へることも出来る。いまにわかになどちらとも決定することが出来ない。空海の言う所によると作者は本朝の日雄人であるが、何人であるかを詳にすることが出来ない。予くれた弁舌を巧みにふるつて、きわどいしやれを連発する面白さは、その名をきいただけで神様代りの形代男も手をうつて笑いこけ、ちよつとその字をよみはじめると、物を言わない啞も大口をあいて叫びをあげるといふような作品である。この作品が實際にはいかなるものであつたかは作品が現存しない今日、はつきりしないが、こゝに示されている点だけから考へてみると、睡覚成の「遊仙窟」とならべ、比較していることから、とにかく同じような作品であり、且相当立派な普及した作品であつたことが言われ得ると思う。空海が「遊仙窟」に著と言つたのに対して、「睡覚記」には述と言つているのを見ると、一つには同義をあらわす修辭の変化であらうけれども、此の作は、漢文ながらわが国の口語に近い味を持つていたものであらう。ふみこんで言へば「古事記」や「風土記」、氏文などの如く、漢字をかいた国文であつたと推測されないこともない。勝弁、詭言は、後に掌を拍つて大いに笑い、口を張つて声を著ぐ等と言つてのを見ると、無論滑稽を面白く弁し立て、きわどい洒落や、驚を鳥と言ひ黒める類の機智的笑話を意味するのにながいがなく、同時に苦

虫に笑わせ、啞人をふき出させるという形容が、通俗人に親しみのある和臭の濃厚なる存在を暗示しているように思われる。睡覚成とならべて、先人と言い遺美と言つてのを見ると、作者はすでに故人となつてゐる文人であらう。「遊仙窟」とならべて記し、「雙警指掃」に対する先行の競争者としてゐるのを見ると、凡そこの前後の二作に比すべき程度の物語であつたのである。こゝういふように考へてくると、滑稽を連発する和具を帯びた、そして「雙警指掃」の先軀の一つとなり、「遊仙窟」にも対比すべき作がこの「睡覚記」であり、のちの和文の「竹取物語」の滑稽などをすぐに連想しうるわけである。

「睡覚記」について一応思ひうかべることの出来るのは「万葉集」巻第十八に収められている次のような一連の文章と歌とである。

越前國の掾大伴宿禰池主の來贈れる戯歌四首

忽ち恩賜を辱くす。驚欣已に深し。心中咲を含みて、独座箱開けば、表裏同じからず、相違何ぞ異れる。所由を推量るに、率爾に策を作せる賊。明に知る言を加ふること、豈他意有らんや。凡そ本物を貿易するは、其の罪輕からず。正賊倍賊、宜しく急に并せ満たすべし。今風雲に勸して後使を發遣す。早速返報して、延回すべからず。

勝宝元年十一月十二日、物を貿易せられし下吏、謹みて貿易人を断る官司の廳下に訴ふ。

別に白す、可憐の意、黙止すること能はず、聊か四詠を述べて睡覚に准擬す。

草枕旅の翁と思はして針を賜へる縫はむ物もが

針袋取りあげ前に置きかへばおのともおのや裏も継ぎたり
はり袋帯び繞けながら里ごとにてらさひ歩けど人も得めず
とりが鳴く東を指してふさへしに行かむと思へど由も笑なし
右の歌の返報の歌は、脱漏して探り求むることを得ず。
更に來贈れる歌二首

賦使を迎ふる事に依りて、今月十五日、部下の加賀郡の境
に到來せり。面蔭に射水の郷を見、戀緒を深海の村に結
ぶ。身胡馬に異なれど、心北風に悲しぶ。月に乗じて徘徊
し、曾て為す所無し。稍來封を開く。其の辞云々。著者先
に奉る所の書、返りて畏る、疑に度れる歟。僕唄囃を作り、
但使君を惱す。夫れ水を乞ひて酒を得、從來能口、論時理
に合はば、何ぞ強吏と題せむや。尋ぎて針袋の詠を誦する
に、詞泉酌めども渴ず、膝を抱きて独り咲ふ。能く旅愁を
綴く。陶然として日を遣る。何をか慮らむ、何をか思はむ。
短筆不宜

勝宝元年十二月十五日、物を徴りし下司、謹みて
不伏の使君の記室に上る。

別に奉る云々の歌二首

駭様にも彼にも横様も奴とぞ吾はありける主の戸の外に
針袋これは賜りぬすり袋今は得てしか翁さびせむ

この針袋を中心の話題にしたひとかたまりのものは諸註をみても
ある滑稽なものであることが想像し得られるだけで、なぜどうし
て滑稽なのか、その点がはつきりとしれない。針袋そのものの探求
か、或はこのひとかたまりの文章と歌とに何か背景を見出すかし

なければ本当の面白味は分つては来ないのではなからうか。この
文章の中に准擬睡覚ということがあつて、ねむけさまし云々と解
釈しているのが普通のようである。この睡覚を空海の言う「睡覚
記」にあることは、あるいは唐突で若干の無理がないわけでは
ないかも知れないけれども、そう解することによつて大した不合
理がなくあてはまるようでもある。そして更にそこから「睡覚記」
の滑稽の具体的内容をも想像することが出来るのではないかと考
える。「万葉集」のこの一連の記事は天平勝宝元年(七四九)であつ
て、空海の記述との間には約五十年のひらきがある。空海の筆致
によると「睡覚記」は日本の物語であり、それも一般うけのする
滑稽なものであつたことは分るし、また広く流布していたもので
あつたことも想像せられるので、「万葉集」の頃には既に世間に知
れ渡つていた作品であつたと思つても不合理はない。こうした「睡
覚記」の存在を考へることによつて「万葉集」の笑いの源も分つ
てくるのではないかと思うし、又空海のいう「睡覚記」の内容に
ついては相補つていくらかでも想像し得るものがあると思う。

「日本書紀」は弘仁年間(八一〇—八二三)に奈良薬師寺の沙
門景戒の著わしたものであると言われている。著作年代を延暦六
年(七八七)までさかのぼることも或は可能かも知れないが、相
当の疑義があるので一応平安遷都以後の弘仁何年かにしておく。
この弘仁年間には空海の「文鏡秘府論」や「文筆眼心抄」が書か
れたり、また「凌雲集」と「文華秀麗集」とが勅撰せられた時で
もあつて、文藝の上では特色のある年間である。景戒の伝の詳細

は不明の点が多い。この作品の成立の事情は序によつて知る事が出来る。まず書名はくわしくは「日本国現報善惡靈異記」というのであつて、本書の内容をよく示していると言ふべきである。日本の国に現に応報した善や惡の不思議な話というよふな意味であるらしい。これによつて考えられることは、日本という意識をもち、その上に立つて、現在の善惡物語であるが、それらは仏教的な因果応報の特色を持つたものであるといふことである。この内容はこの物語をよむことによつて直ちにうなずけるであらう。なおもう少し詳しく序文によつてこの作品の主張するところを検討してみると、凡そ次のようにならうと思ふ。

「靈異記」三巻のどの巻にも序がついているが、その中で最も大切なものは上巻の序である。もとく百濟から日本に仏典その他が伝來したのは二つに分けられる。應神天皇の時に仏教以外の書が伝わり、欽明天皇の時に仏典が伝えられた。外典を学ぶものは仏法をそしり、内典をよむ者は外典を軽んじた。たゞ仁徳天皇とか、聖徳太子とか、聖武天皇とか、或は高僧たちによつて地上に仏教の染土をあらわしたこともあつたが、いまの世の中を見ていると実に憂慮にたえないものがある。善惡の状をしめすのでなければ、何を以てか惡心を正してよしあしを定めよう。因果応報の理を示さなければ、何によりてか惡心を改めて善道を修めよう。

昔漢地造^三冥報記、大唐国作^三般若驗記、何唯慎^乎他国、伝録^二弗^信、恐^乎自土^三奇事、粵^起自^隱之、不得^二忍^懷一^屈心思^之、不能^二默然^一、故聊^注側聞^一、號曰^二日本国現報善惡靈異記^一、作^二上中下^三參卷^一、以流^二季葉^一、(中略)

祈^{カク}、覽^ニ奇記^一者、却^レ邪入^レ正、諸惡莫^レ作、諸善奉行^{セト}

昔漢土に「冥報記」や「般若驗記」があつたが、自國の奇事にも注意しなくてはならない。そこでじつとしていることが出来なくなつて、自分の見聞を誌し、この「靈異記」をつくり後世に伝えるのである。が自分の力未熟であつて十分につくしていないが、どうかこの書を見る人は邪をしりぞけ正に入り、諸惡なすことなく諸善を行ふようにしてほしい。ついで中巻序にも仏法への帰依をとき、自分の文章は至らないが、これを見るものは仏道を成就してほしいと言ひ、更に下巻序に至つてもその説く趣旨は同一であるが、最後に

遠愧^三前非^一、長折^三後善^一、注^ニ奇異事^一、示^ニ言^一、捉^ニ流^一、援^レ手^ニ欲^レ勸^ニ濡^一足^ニ欲^レ導^一、庶^ニ掃^レ地^ニ共^レ生^一、西方極樂、傾^ニ巢^一、同^ニ住^一、天上宝堂^ニ者^一矣。

とすべてのものが極樂浄土に行かれることをねがつている。「靈異記」の中には文藝として意識している点は明白に認めることは出来ないし、又これを所謂純文藝作品とみることに勿論論はあるであらうが、現存の作品を文藝作品として扱つて当らないことはない。当然この作品は作者の意識中に文藝があらうとなかろうと作品として扱ふべきものである。むしろこのように序文をつけているところ、そしてその序文の中に本書の由来趣旨を明示しているところに、積極的に文藝として取り上げなくてはならない要素を含んでいると考へるのが当然である。本書の目的、表現などについて論じていること前述のようである。そしてこの序文の中にはむしる積極的に目的的文藝観を見出すのである。作者の卑下

も勿論あるが、表現はつたなくても、この書によつて仏教的な目的を達しようとし、また達することも出来得ると説いているのである。仏教弘通の意図をもつて書かれた作品であり、またその反面或は根本には、文藝というものをそいう効用あるものと考えていたのである。この事は空海の「譬指帰」なども共通の考え方である。そして大陸伝来の書にたよることなく、日本と書名にも示しているように、本朝のものをつくるという明確な意図を示していることも空海に似ている。思うに大陸の文化は一応吸収し、あらためて反省期にはいつた時代の産物であることを示しているわけである。創作意図に於ては「記」・「紀」や「古語拾遺」とも共通性があると考へてもよいであらう。こういふように「靈異記」の序を検討してくるならば、功利的な文藝観というのが平安時代の初期には厳存していたことが分つてくるであらう。その根本は大陸から渡つてきた思想であることにはちがいないが。そしてこういふ文藝に対する見解が當つているかどうかということは主観的な問題であつて、存在したという事実は客観的事実であつて否定することは出来ない。空海の作品に於てもそうであつたが、この景戒の作品に於ても、この中に日本の物語小説の生育を見てゆかなくてはならない。物語の発生を「竹取物語」におく見解は一応は正しい。しかしなぜ「竹取物語」があつたものとして出てきたかという根源をさぐることは、更に必要なことである。和文でないからという単純な理由でしりぞけられてよい問題ではない。この意味から「靈異記」は再検討せられなくてはならない作品であるし、また著作時期をきらかにすること

とは出来ないが、「浦島子伝」なども見直されて然るべき作品ではなからうか。「竹取物語」に前後して著述されたとも言われ得る作品であるならば、一層大切な意味をもつてくるであらう。「浦島子伝」を「群書類従」によつてみると、「万葉集」巻九にある水江浦島子の歌とは少しちがつていて、純粹に神仙譚になっていると見てよい。浦島子の行つたのは不死長生のところであつたが、再び戻つてきて白髪になつてしまつたことは一般の伝説とその軌を一にしている。この徹底した神仙譚はちやうど「竹取物語」と同じと考へてもよいであらう。超自然的な偉大な環境を背景にしてゐるこの神女とカグヤ姫とは、根本は同じであるであらう。「浦島子伝」は修辭的にも用意せられてゐる作品であつて、例えば、

清池之波心、芙蓉開、臂而發、榮。女泉之涯頭、蘭菊含、咲不稠。

のように、必ずしも通俗的な物語とは言えない。この点では「譬指帰」などに近いものをもつていふと言えよう。小説、物語として伝記的にえがこうとして描いてゐるものであるにはちがいはなく、その特色は「譬指帰」と「竹取物語」との中間にあつたと言つてもよいものであらう。

空海の「譬指帰」や景戒の「靈異記」は文藝に対してはつきりと意識したものをもつて著作をしてゐることは上述の通りであつて、そのねらいは對社会的な効果にあると言わなくてはならない。さらに主眼点は仏教にあることも共通したことである。この二つはそのかき方に於ては必ずしも同一ではなくして、空海の方

は抽象的ではあるが積極的に論じようとしているし、景戒の方は具象的に小さな話をおつめて読者の対象をひろく浅いものにしてゐる。仏教弘通を意図した対社会的文藝であるということが出来る。こういふように文藝―物語を功利的に駆使しようとすることのよしあしは別にして、とにかくこの二作品は未だかつてこれほどはつきりと言わなかつたような明確さをもつて物語を律し、利用活用しようとしていることは注意すべきことである。外来文化の影響とその普及のためとは言え、日本の文藝の歴史にこういう功利的対社会的文藝観、物語論が作品と一体となつて出たということは特に注意しなければならないことである。

これに反し、空海が自己の立場と対立的に考えたのが散勞書と睡覚記とであつた。一方は外来の短篇物語で風俗的な悪影響を問題にしたものであり、一方は滑稽な写実的なものをもつた日本の作品であるが、やはり人をふかくみちびいてゆくには足らないものであつた。文藝としてはともに認めてはいるが、その社会的な影響力の故に取り上げられたものゝようである。「遊仙窟」は中国の小説であるから別とするにしても、「睡覚記」は日本の小説であり、その滑稽さの故に流布したとすれば、いづれどういふ形にして辛辣な批判の載せられている作品であるということは考えられよう。対社会的には何等の積極的な功利的意図をもたないものであつたであらう。反面には社会に対する批判がいかなる形かに於てなされているとみてよい作品であつたであらう。空海などの行き方とは別な意識が自覚せられない自覚のもとになされていたのであらう。「遊仙窟」や「睡覚記」の存在流布が空海の「警覺指

帰」をなさしめたのであつて、対社会的には消極的であるか積極的功利的であるかの差こそあれ、文藝に対する自覚の点ではさして大差はなかつたのではないであらうかと思ふ。

物語の祖と言われる「竹取物語」の著作は、空海や景戒から数十年、恐らく百年をこえた後ではなかつたであらう。「竹取物語」がどんな経緯で著作されたかは知らないが、とにかく含まれている重要な要素はすでに上述のいろいろのものの中に見る事が出来る。田中大秀が博搜して論じているような素材がはたして「竹取物語」にとられたかどうかはこれからの課題に属する部分があらうが、少くともあつた素材が用いられたというその根柢にはまづがいがないうである。空海に於ても景戒に於てもどれだけ多くの材料をてがけていたか、故事などを含めたならば恐らくはかり知れないものがあるであらう。「竹取物語」には相当広汎な素材が自由に駆使されているであらう。しかし駆使する態度はこれら二人の作者とはちがつたものをもつていたのであらう。社会小説でも滑稽物語でもある「竹取物語」の根柢には、日雄人のやつてのけたような鋭いものがかくされているとみてよいであらう。大陸文化の象徴でもあるようなカダヤ姫の言動を始から終まで通観しその根本的態度を見るならば、優越された大陸文化に対する憧憬が憧憬としてだけしか満されなかつた当時の日本の日本の実状が示されているのである。宝物は一つも得られないし、帝をもしりめに昇天してしまふカダヤ姫を思うならば、消極的に、功利的でない批判がきびしく当時の社会に対してなされていたのであつた。とげられないところからかもし出されてくるのが滑稽であつたのである。

対社会的に積極的に功利的に用いて然るべき素材を消極的に対社会批判として用いたのが「竹取物語」であつて、どういふ形かで自覚された物語が根柢にあつたと考えてよいであらう。空海、景戒と日雄人もつていたものが素材と態度との両面になつて出来たのが「竹取物語」であつたであらう。「源氏物語」などはこの両面の有機的化合であつたかも知れない。

「竹取物語」は和文の物語であり、これ以前に同種のものが存在したかどうか不明であるが、文章表現の上から見ても、次に一例を示すように、漢文脈との完全な連絡が想定せられてよいのではないかと思ふ。

昔者、此の里に土蜘蛛あり、名を海松權媛と曰ひき。(肥前國風土記)

昔者娘子あり、字を桜姫と曰ふ。時に二の壯子あり。共に此娘を誂む。(万葉集)

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、万づの事に使ひけり。名をば譚岐造麿となむいひける。(竹取物語)

むかし、男ありけり。初冠して、奈良の京、春日の里にしろよしして、狩にいきけり。(伊勢物語)

奈良時代から平安時代初期に至るこれらの作品の表現については詳細に検討すべき余地があるけれども、こゝにあげたものによつてみても、「竹取物語」のあの簡潔な文章が、単に口誦的な性格のためのみの特色とは言いきれないで、その口誦性のもつ簡潔さの

中には、今まで育つてきた漢文脈のあることがうかゞえらると思ふ。はつきりと直訳とも言われないし、漢文くずしとも言われないが、それに類似した特色が徐々に「竹取物語」まできて、和文的表現となつたのであると考えてもよいであらう。「語る」性格が基本となつての表現であつたのであらう。「竹取物語」のもつ物語の祖としての要素は、内容の上からも形式の上からも、何れもそれ以前のものから得ている点が多分にあり、僅かに考え及びうるものが以上のようなものである。そして大陸渡来の文藝が何れの要素にも不可欠のものとして大きな地位を占めていることも容易に分るであらう。たまく／＼仮名の発生流布が「竹取物語」のような作品の出現を促したのもあつた。

日本に於て物語や物語論がどんな形をとつて生育してきたかを知ることは困難なることであるが、平安時代初期には上述のように物語と物語論とが併せ存在したことが認められる。これ以前にいかなる形になつていたかは今にわかには断ずることは出来がたいが、文藝の中の和歌に於ては奈良時代にすでに意識的なものを見ることが出来る。物語・物語論の発生の明瞭なものがいゝゆる純粹文藝の世界から出発しないので、当時の最も進歩的な思想家の間から出たことは、外来の唐文化受入時代として当然のことゝは言うものゝ、これ以後の物語・物語論を見てゆく上に多くのことを考えさせるであらう。物語が名実ともに「竹取物語」のように和文の物語になるまでには、形式内容ともに大陸文化の影響を多く受けたであらう。